INTERNATIONAL & INFORMATION STUDIES

新潟国際情報大学

Vol.33

学報
国際・情報

[本校] 〒950-2292 新潟市みずき野 3-1-1
tel. 025-239-3111 fax. 025-239-3690
[新潟中央キャンパス] 〒951-8068 新潟市上大川前通 7-1169
tel. 025-227-7111 fax. 025-227-7117
http://www.nuis.ac.jp somu@nuis.ac.jp

平成19年1月10日 発行

明るい将来を築く新年

学長 武藤 輝一

心構えを新たに…

新しい年を迎え、学生諸君は勉学に新たな覚悟を持って臨んでいることと思います。またご父母、教職員の皆さんにはますます元気にご活躍のことと存じます。

本学は開学以来満13年になります。これまでに9回の卒業式を行い、卒業生も2、657人を数え、本年3月には第10回卒業式を、4月には第14回入学式を迎えます。新潟国際情報大学の名称も広くかつ確実に認識されるようになり、大変うれしく思っている次第です。

最近、小・中学校では、学習・進学塾の勉強に力を入れている生徒を除くと、学校外ではほとんど勉強しない生徒が多く、同時に無気力な生徒が多くなってきたといわれています。これは小・中学生が自分自身をはっきり認識するという教育を受けていませんし、また外から強く認識させられる機会が少ないためかもしれません。一方、最近の大学生にも自主性、自立性に欠け無気力な学生が少なくないといわれています。

本学では"キャリア開発"教育で、まず自己をしっかり認識することからはじめ、当該学年次の学生の多くがインターンシップに参加していることによるのでしょうか、卒業前から自分の将来のこと、選択する職業のことをはっきりと意識するようになっており、ほっとしているところです。私の時代は、大学入学のため家を離れることが少なくなく、在学中のアルバイトも必須のものでした。そして大学を卒業すると、多くは両親、兄弟、姉妹のいる家を離れ、まず職に就き一人での生活から始めました。自立心を持つよう教育を受けたわけではなく、自立志向がなければ、働き、生きて行く人生からの脱落者になってしまうからでした。ご両親、ご親族の温かい保護があるのは大変ありがたいことですが、これに甘えすぎ、その中にどっぷりと浸かるのではなく、しっかりと自立心を持った社会人として活躍できるよう、学生時代から心掛けようではありませんか。

しっかりと自主自立を

ご父母の皆さまや本学の卒業生を採用いただいている企業、機関の皆さまからは、本学の学生教育・指導のあり方につきまして、いつでも遠慮なくご意見をお寄せ頂きたいと存じます。これからの本学の学生教育・指導に役立たせてまいりたいと存じます。なお、本学では平成19年度内に日本高等教育評価機構による認証評価を受けることにしており、大学自らが常に自己点検・評価を行い教育研究の充実を図ってまいります。

新しい年を迎えられ覚悟も新たな皆さま方のますますのご健勝とご活躍を祈念し、ご挨拶と致します。

CONTENTS

2・3面
研究集会など相次ぐ（新潟中央キャンパス）
中国とテレビ会議ー共同研究プロジェクト
情報システムと社会環境研究会
日本平和学会中部地区研究集会
情報文化学科で出版
宮田亮平東京藝大学長が講演（連携講座）
新任教員紹介
4・5面
私の研究テーマ
お薦めBOOK
教員の活動（2006年下半期）
6面
国際インストラクター体験報告
卒論中間発表会開く
課外活動報告（スポーツ大会など）
7面
恒例の企業懇談会開く
就職内定者の一言
平成19年度入試日程案内
8面
卒業生の便り
「紅翔祭」報告
湧源（編集後記に代えて）

本学（新潟中央キャンパス）を舞台に相次ぐ

「学生の視点から考える～新潟と中国 テレビ会議システムを利用した オルターナティブ・メディアの構築」

新たな国際理解教育のあり方を模索

本学新潟中央キャンパスと、JICA中国事務所（北京市）をつなぐテレビ会議「学生の視点から考える～新潟と中国―テレビ会議システムを利用したオルターナティブ・メディアの構築」が11月25日に実施されました。

このテレビ会議は、学生が情報収集・発信に主体的にかかわり、既存のメディアとは異なるメディア（「オルターナティブ・メディア」）を構築することによって、新たな国際理解教育のあり方を模索していく本学の共同研究の中で着想されました。テレビ会議の中では、北京と新潟の現在の状況を互いに報告することによって、草の根レベルでの交流を促進しつつ、北京および新潟に関する等身大の情報を交換すること、さらに日中間協力の可能性を探ることを課題としました。

当日は、日本側では本学教員、学生、卒業生、一般市民を含む約40人が、一方の中国側では、本学と提携関係にある北京師範大学歴史学院教員と大学院生、そして同大学に留学中の本学学生を含む約30人が参加しました。北京師範大学歴史学院長の楊共楽教授による開会のあいさつに続いて、第1部では、北京師範大学歴史学院の梅雪芹教授から「中日の環境問題とその保護」という題で、戦後日本の公害問題の経験がいかに中国の人々の現在の環境問題への対応に生かされうるのかが報告されました。日本側会場では、「中国の学生は環境問題にどの程度関心を持っているか」、「日本の学生が中国の環境問題に対してできることはあるか」などの質問が学生からなされ、討論が行われました。

第2部では、北京師範大学歴史学院の唐利国副教授から、オリンピック開催を控えた北京の現状が報告されました。日本側会場では「北京の町並みの変化に対する地域住民の反応はどうか」、「北京以外の地域への社会的経済的効果はあるのか」などの質問が学生からなされ、討論が行われました。

第3部では、本学学生が作成したビデオ「新潟の現在」が上映され、新潟水俣病や新潟の消費文化についての報告が渋谷孝政さん（情報文化学科4年）から行われました。中国側会場からは、「日本の学生は環境問題に対してどのような取り組みをしているのか」などの質問がなされ、渡邉悠規さん（情報文化学科3年）がリプライする形で討論が行われました。最後に本学情報文化学部長の槻木公一教授による閉会のあいさつで会議を終了しました。

2時間のテレビ会議でしたが、通信上のトラブルもなく、いずれの報告にもテレビ会議システムを通して相手国の学生からの質問がなされ、活発な討論に発展したことなど、会議は成功裏に終了することできました。JICA、北京師範大学歴史学院の協力でテレビ会議を実施できたことは、本学の国際理解教育のさらなる発展にとって大変貴重な機会となりました。今後も、JICAの協力もいただきながら、テレビ会議システムを国際理解教育に導入する試みを行っていきたいと思います。

（情報文化学科助教授・長坂　格）

「情報システムと社会環境研究会」

地域・技術・新概念―多様なテーマで最新の学術情報に肌で触れる

第98回情報システムと社会環境研究会が11月6日、新潟中央キャンパス9階講堂で開催されました。同研究会は、情報処理学会の研究会の一つで、本学中央キャンパスでの開催は2回目となります。

本学からは、近藤進教授から「新潟県の情報通信インフラと災害に対する情報通信への課題」と題して、県内一般家庭へのアンケート調査に基づくデジタルディバイドマッピングと災害時の情報収集と連絡に用いる通信手段への期待度についての研究発表がありました。

ほかには、地域に根ざしたテーマである「産地直売所における農作物出荷支援システムの開発」（岩手県立大）や、大学や学生に関係する「実業家と学生の交流会前後における学生側の変化分析」（東大）、「情報システム設計演習のためのコミュニケーションを重視したCSCL環境の開発」（静岡大）といった研究、また「Webコミュニケーションツールのためのコンポーネントの提案」（専修大）、「エージェントベースシミュレータを用いた感性パラメタを持つ経営組織のシミュレーション」（岩手県立大）といった情報技術を応用した研究、さらに、「生産管理システムの概念モデルと生産座席予約の意味について」（㈱エクサ）、「設計会議におけるアイデア生成・合意形成のための制御手法」（東大）、「Human-Interactive Annealing手法を用いた特許技術の新たなシナリオ創発」（東大）といった新しい概念に関する研究など、興味深い発表がなされました。

このような研究会を聴講することにより、最新の学術情報に触れることができるとともに、質疑応答などから、研究テーマの位置づけの重要性、研究活動における緻密さや完成度の重要性を肌で感じることができます。

今回は、本学との共催であったので、本学教職員および学生の聴講は無料（資料が必要な場合は実費要）でした。聴講した本学の3年生は、その迫力に、自身の卒業研究への取組みに関し、姿勢を新たにしたようです。

（情報システム学科助教授・桑原　悟）

出版、研究集会……

「日本平和学会・中部地区研究集会」

東アジア平和のための研究者ネットワーク構築

新潟を拠点にローカルな視点で

「東アジアの〈共生〉に向けて―ローカル・アプローチ」と題して、10月8日と9日、新潟中央キャンパスで日本平和学会中部地区研究集会が開催されました。

国際都市新潟を拠点に、ローカルな視点から東アジア平和の実践的条件を探るべく、特に名古屋や新潟など中部地区の研究者が一堂に会しました。会の冒頭では、篠田昭新潟市長も駆けつけ、政令指定都市新潟が、今後とも東アジアの国際交流の中心地として重要な役割を果たす可能性を語り、学会へのエールを送りました。

1日目は、「ローカル・コミュニティにおける共生」、そして「東アジア安全保障共同体に向けて――エネルギー問題の視点から」と題する2つの部会が開催されました。「共生」部会では、五十嵐暁郎氏（立教大学）が司会。高野秀男氏（新潟県平和センター）より、新潟水俣病や県内朝鮮学校をめぐる問題の現状に関する報告、佐竹眞明氏（名古屋学院大学）より、日本における長期滞在外国人との共生問題について、山崎公士氏（新潟大学）より、国際法からみた人権問題の争点についての報告があり、それら報告に対し、本学の越智敏夫教授が討論を行いました。

また、次の「エネルギー」部会では、黒田俊郎氏（県立新潟女子短大）が司会。本村真澄氏（石油天然ガス・金属鉱物資源機構）がロシア・極東におけるエネルギー問題、本学の吉沢文寿助教授が朝鮮半島のエネルギー問題についてのきわめて実践的な報告を行い、高原明生氏（東京大学）が討論を行いました。

2日目の最終部会では、前日の成果をふまえ、「東アジア研究者ネットワークの可能性」と題し、本学の佐々木寛が司会。環日本海学会や環日本海研究ネットワーク、新潟日報主催の「朝食会」を代表し、それぞれ、若月章氏（県立新潟女子短大）、櫛谷圭司氏（新潟大学）、本学の小林元裕助教授がこれまでの県内研究者の横のつながりについて総括を行いました。

会場には、環日本海経済研究所（ERINA）や敬和学園大学の研究者も駆けつけ、今後の県内の東アジア研究ネットワークの再構築に関する建設的な討論と提案がなされました。本学を舞台に、これまでになく広範な研究者が一堂に会する画期的な試みとなりました。

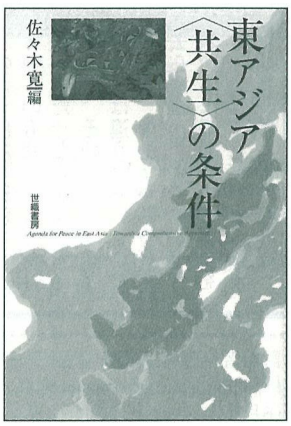
（情報文化学科助教授・佐々木寛）

『東アジア〈共生〉の条件』を刊行

創立10周年記念シンポをもとに 本学の開学理念の問いに答える試み

ついに、ようやく、刊行にこぎつけた。今から3年前の6月に開催された本学創立10周年記念シンポジウムの内容をもとに、その後、情報文化学科のスタッフが何度も加筆修正を加え、作り上げた本である。

執筆者には、本学教員のほかに、中国北京師範大学の梅雪芹先生、ロシア国立極東大学のウラジミール・アントーノフ先生、韓国慶熙大学の安栄洙先生、アメリカノースウェストミズーリ州立大学のブライアン・ヘス先生など、海外提携校の研究者が含まれ、また、大阪経済法科大学の武者小路公秀先生、敬和学園大学の松本ますみ先生、新潟大学の芳井研一先生など、国内他大学からも貴重なご寄稿を賜わった。編者である私の無能力から、予想以上に刊行が遅れたが、特にこれら他大学からご協力いただいた先生方には、この場を借りて心からお詫び申し上げたい。



東アジアの「危機」が叫ばれる時代に、東アジアの「平和」の礎を担うべく創設されたわが大学に何ができるか。本書は、その問いに懸命に答えようとした一つの結果である。

東アジアの海を臨む、新潟の小さな私立大学からのささやかな発信が、やがて日本全国に響き渡ることを願ってやまない。また本書には、「環日本海」の国際交流に生涯を通じご尽力された、故市岡政夫先生のまさに「最後の」論稿も掲載されている。若い世代の読者にとって、本書が市岡先生のメッセージの一端に触れられる契機ともなることを願う。（世織書房・三三〇〇円）

（情報文化学科助教授・佐々木寛）

「芸術は身近なもの」

宮田東京藝大学長が講演

本学と新潟日報社連携の公開講座が11月25日、東京藝術大学学長の宮田亮平氏を招いて新潟中央キャンパスで開かれました。同氏は佐渡氏出身で、本学創立10周年記念事業で同キャンパスロビーに記念モニュメント「シュプリンゲン（飛翔）」を創作しています。

「芸術は身近なもの」と題し同氏は、自らの作品を映像で紹介しながら「身近に素晴らしい作品群があることで、街が活性化し、人々の心が和み、豊かな環境が生まれる。自分自身の〈ときめき〉を形にするのが芸術」などと、ユーモアあふれる語り口で約200人の聴衆を魅了していました。

新任教員紹介

池田 嘉郎（情報文化学科講師）

＜担当学科＞
ロシア語、ロシア史概説、国際研究ゼミナール

＜専門分野＞
近現代ロシア史。帝政末期からスターリン時代にかけての政治史を分析。ソ連期をより長期的なロシア史の文脈に置き直すことが研究の狙い。今後は日露両国が近代化の途中でお互いに与えた影響についても検討。

＜略　歴＞
1994年3月　東大文学部西洋史学科卒。96年3月　同大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻修士課程終了。2005年10月　同博士課程終了。03年4月～06年3月　日本学術振興会特別研究員。04年4月～06年8月　東京理科大、成蹊大、日大、敬愛大非常勤講師。

私の研究テーマ

「ロシアとは何だろう」

情報文化学科・講師　池田　嘉郎

私はロシアの歴史を研究しています。ずっとソ連時代について勉強してきたのですが、最近ではそれ以前の帝政時代や、現在のロシアにも大きな関心を持つようになりました。以前の私には「ソ連とロシアは違う」というこだわりがあったのですが、最近ではこの考えは180度変わって、「ロシアはロシアだ」と開き直るようになりました。

1990年、私が大学に入ったころ、ロシアではペレストロイカが暴走して、国中が大混乱に陥っていました。ゴルバチョフの不手際で始まった大陸規模のこの激変に、極東の島国の1年生も巻き込まれたわけです。今、ロシア人がゴルバチョフのことを、国を滅ぼした張本人として悪く言うのはよく分かるのですが、私にとってはロシア留学のチャンスをつくってくれ、自由に史料を読むのを許してくれた人ですから、一言彼にありがとうと伝えたいと思っています。

最初にロシアに行ったのは、ソ連がなくなった後の1992年で、大学3年生の夏休みでした。1週間の旅行でしたが、露店で400円の勲章を買ったり、反エリツィン集会を見学したりと、ソ連の残骸にばかり気をとられていました。新生ロシアに正面から向き合う気持ちがなかったのだと思います。

初めて研究のためにロシアに行ったのが、1997年の春休みのことで、このときはモスクワに1カ月いました。史料の筆写に疲れたある日のこと。バスの車掌が大変な美人で、ピンクの毛糸の帽子にグレーの毛皮をはおって切符をちぎって回るのが、一瞬ファッションショーのように錯覚しました。また天気のいい昼下がりのこと。横丁を歩いていると、色とりどりの路面電車が操車場に集まってキラキラ輝いているのに出くわしました。このとき、ふとロシアは大きなサーカスのようだなと思い、ソ連というのもサーカスの演目の一つだったのかなと考えました。その後も「ソ連とロシアは違う」というこだわりは、なかなか私の頭を去らなかったのですが、それでもこの操車場の風景をきっかけにして、私は徐々に「ロシアとは何だろう」という問いに、深くはまり込んでいったのです。

「地域活性化と地域ブランド」

情報システム学科・助教授　吉田　博

私は、長年、コンサルタントとして、マーケティングの実務・調査研究に携わってきました。マーケティングは、新商品の開発、販売、広告活動等にかかわるものですが、これまでメーカー、流通業、サービス業の仕事をしてきました。また、民間企業だけではなく、福祉団体や自治体のまちづくりもお手伝いしました。かつて、今は合併して上越市になった大島村において、地域の大事な資源を活用して過疎地域を元気にするという目的で、私が企画しました「人間村宝」というイベントを実施したことがあります。

長年にわたり携わった領域としては、地域の地場産業の振興があります。地域の自然・文化・技を生かしてつくられる地域固有の食品、家具、陶磁器、工芸品、農産物等に関しての調査研究、新商品の開発やプロモーションの展開に参画しました。

具体的な地域としては、特に、岩手県の県都である盛岡市があります。この地域は南部藩の歴史を受け継ぐ南部鉄器や南部染め等伝統工芸品、庶民の味として親しまれている南部せんべい、そば、最近では盛岡冷麺が有名です。市内の事業者・農家によってつくられる産品を盛岡特産品ブランドとして認証し、市内外の人々に広く浸透させていくことを目的とした盛岡ブランドづくりに、地域ブランドアドバイザーとしてお手伝いしています。

今までの経験を生かし、今後は県内でつくられる新潟らしい特産品、県内外から人々を引きつける観光の振興に役立つような研究や実践に携わっていきたいと思っています。

魚沼産こしひかりや新潟のお酒は、全国的にトップブランドとして評価されていますが、県内には、ほかにもいろいろと優れたものがあります。県内にあるさまざまな特産品や地域が、県内外から新潟ブランドとして高く評価され、それぞれの地域が活性化されるよう貢献できればと考えています。

・「日韓をむすぶ市民交流―教科書問題と戦後補償問題に見る―」シンポジウム「いま、アジアで―国家を越えた交流を深める東アジア―」（新潟国際情報大学新潟中央キャンパス、7月）。
・「日韓会談研究の現状と課題～日韓会談文書にどのように向き合うか」日本学術振興会科学研究補助金　韓国政府公開資料による日韓基本条約の国際共同研究　基盤A（東京大学駒場キャンパス、7月）。
・「朝鮮半島のエネルギー問題と環境保全～韓国の事例を中心に」日本平和学会中部地区研究集会（新潟国際情報大学新潟中央キャンパス、10月）。

4）その他

區建英（情報文化学科・教授）
・総合コーディネーター「日中交流セミナー：ナショナル・アイデンティティをめぐる相克」（北京大学国際関係学院、8月2日～3日）。
・講演「厳復とモンテスキュー：「仁政」の転回と政治的自由」国際シンポジウム「アジアの近代とフランス」文部科学省オープン・リサーチセンター整備事業「フランス革命と日本・アジアの近代化」（専修大学歴史学研究センター、11月18日）。

小林元裕（情報文化学科・助教授）
・書評「日中戦争と上海、そして私－古厩忠夫中国近現代史論集」『日本植民地研究』第18号（74-80頁）。
・パネリスト「東アジアの〈共生〉に向けて－ローカル・アプローチ」第3部会「ラウンドテーブル：東アジア研究者ネットワークの可能性」日本平和学会中部・北陸地区研究集会（新潟国際情報大学新潟中央キャンパス、10月9日）。
・講演「変化する中国と日本へのまなざし」ながおか市民大学「東アジア－過去と現在」（長岡市中央公民館、11月10日）。

佐々木寛（情報文化学科・助教授）
・書評「平和研究のダイナミズム―新しい社会理論の道標」『図書新聞』。
・「万景峰号のいない8月」『新潟日報』（8月15日）。
・討論者「平和学の方法と実践」日本平和学会（明治学院大学、6月11日）。
・司会・討論者「発展と人間安全保障」日本平和学会（山口大学、11月11日）。
・講演「平和憲法を守るために、今私たちにできること」長岡非核・護憲市民の会（6月8日）。
・講演「Pacifism in Japan」中央大学留学生サマープログラム（7月10日）。
・講演「国境をこえる社会運動」（新潟青陵大学、7月18日）。
・講演「教育の可能性」新潟県高等学校教育労働問題研究会（8月19日）。
・講演「東アジア＜共生＞の条件」巻町労働者連絡協議会（9月19日）。
・講演「＜メディア＞と私たちの暮らし」平和センター学校（10月28日）。
・講演「国民投票法案をめぐって」新潟キリスト者平和の会（10月28日）。
・解説講演「紛争に苦しむネパール」アムネスティ・インターナショナル　スピーキングツアー（11月3日）。
・パネリスト　新潟市国民「保護」計画素案を考えるシンポジウム（11月25日）。
・講演「ファシズムの最中にあって」9条しばた市民ネット（12月13日）。

長坂格（情報文化学科・助教授）
・講演 "A Comparative Study of Infant Care Practice in the Philippines and Japan" UP Center for Women's Studies (Quezon City: University of the Philippines, August 17)

藤瀬武彦（情報システム学科・教授）
・講習会「パワーリフティングの対象別指導法Ⅰ（初心者）」日本体育協会他主催（東京大学、11月25日）。

吉澤文寿（情報文化学科・助教授）
・「日韓正常化交渉　日本も文書を公開せよ（私の視点 ウイークエンド）」『朝日新聞』（2月11日）。
・「在日朝鮮人史100年と日韓会談文書公開」『Let's』（日本の戦争責任史料センター）第50号（5-8頁）。
・「日本の朝鮮植民地支配責任の現状と課題―日韓国交正常化交渉とその後」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』（東京外国語大学）第116号（56-57頁）。

お薦めBook

本学図書館のWEBサイトに個性あふれる教員たちの紹介文が載っています。アクセスしてみてください。
〈http://www.nuis.ac.jp/ic/library/book/book2005.htm〉

『朝鮮の土となった日本人 浅川巧の生涯』

高崎宗司著
草風社（増補三版、2002年8月）

朝鮮民芸の研究家、浅川巧（1891～1931）は、1914年朝鮮に渡り、18年間朝鮮総督府林業試験場で養苗実験に従事するかたわら、柳宗悦らとともに「朝鮮民族美術館」（1924）の設立に尽力した人です。彼の著書『朝鮮の膳』（1929）と『朝鮮陶磁名考』（1931、遺著）には、朝鮮民衆の生活、朝鮮の現実に注がれた彼の温かい眼差しが感じられ、彼の朝鮮民芸の研究が芸術の力で朝鮮と日本の間違った状況を克服しようとした努力の一環であったことが伝わってきます。

朝鮮の服を着、朝鮮の家に住み、朝鮮のキセルを愛用し、朝鮮の土となった「朝鮮人を愛し、朝鮮人に愛された」浅川巧。彼の民芸研究家としての業績はもちろん、彼の心温まる人間像を高橋宗司氏は立体的に描き出しています。

国家や民族の壁を乗り越えて生きた浅川巧の存在と、彼を囲む人々の歩みは、我々に新しい歴史観を提示してくれると思います。一人でも多くの日本人・韓国人にぜひこの本を読んでもらいたいですね。韓国では、昨年翻訳されました。

（情報文化学科・教授　申銀珠）

『自白の風景』

深谷　忠記著
徳間書店（2003年）

平成21年には、裁判官と共に殺人や誘拐などの刑事事件の法廷に立ち会い、判決にまで関与する裁判員制度が導入されます。裁判員は、選挙人名簿からサンプリングして作成された裁判員候補者名簿を基に、事件ごとに抽選で選ばれます。したがって、皆さんも裁判員に選ばれることがあるのです。

このミステリーは、一人の弁護士が二十数年を隔てて起きた2つの冤罪（えんざい）事件の間に、緻密な糸を張り巡らせ、手繰っていく。冤罪は深刻な社会的問題であり、取り調べや捜査の過程で生じる事実誤認から生まれるものです。かつての日本にも冤罪ではないかと問題になった事件はいくつかあります。したがって、現在の裁判では自白だけで有罪にすることは難しい。そこで警察は犯行を裏付ける証拠を必死に探すことになります。

第1の事件は、被害者のものと思われる血液が付着したシャツを、容疑者として逮捕した人の住まいから押収しますが、これは警察官によって作られた証拠だったのです。押収の経緯と鑑定方法に疑義があったにもかかわらず、裁判所は有罪の判決を下しました。そして第2の事件の被害者は第1の事件の裁判官であり、容疑者は第1の事件の警察官という筋書き。

読み始めるとどんどん引き込まれていきます。いわゆる専門書ではありませんが、警察官や検事による取調べや裁判のあり方などを考えさせる本です。

（情報システム学科・教授　赤木敏子）

教員の活動（2006年下半期・本人申告による）

1）研究論文・図書

池田嘉郎（情報文化学科・講師）
- 「農村統治とロシア都市―県・市合同の分析（1918-1921）」奥田央編『20世紀ロシア農民史』社会評論社（193-217:716頁）。

臼井陽一郎（情報文化学科・教授）
- 「気候変動問題の構成と国際共同行動の展開：気候変動レジーム・国連環境計画・欧州連合(1)」『慶應法学』第5号（70-128頁）。
- 「同（2）」『同』第6号（130-202頁）。

小山田紀子（情報文化学科・教授）
- 研究ノート「アルジェリア内戦の傷跡―2005年春の旅から―」『国際関係研究所報』2006年度津田塾大学国際関係研究所（17-24頁）。

岸野清孝（情報システム学科・教授）
- 「半導体製造クリーンルームへの冷熱供給システムのライフサイクルコストと環境負荷最小化」『計測自動制御学会論文集』Vol.42,No.10（1168-1174頁）。

小林元裕（情報文化学科・助教授）
- 「日中関係再考」佐々木寛編『東アジア〈共生〉の条件』世織書房（48-56:404頁）。

竹並輝之（情報システム学科・教授）
- 共著神沼靖子編著『情報システム基礎』オーム社（1,2,13,14章）。

吉澤文寿（情報文化学科・助教授）
- 「植民地支配の『清算』とは何か―朝鮮を事例として―」『歴史評論』677号（31-40）。

矢口裕子（情報文化学科・助教授）
- 「境界を吹く風――新しい女性表現と『慰安婦』問題」佐々木寛編『東アジア＜共生＞の条件』世織書房（272-286:404頁）。

2）翻訳

矢口裕子（情報文化学科・助教授）
- グレゴリー・ハドリー「国際英語とアングロアメリカの覇権」『東アジア〈共生〉の条件』世織書房（138-144:404頁）
- ブライアン・ヘス「北朝鮮危機を考える」『東アジア＜共生＞の条件』世織書房（158-181:404頁）。

吉澤文寿（情報文化学科・助教授）
- 安載成（吉澤文寿・迫田英文共訳）『京城トロイカ』同時代社（全359頁）。

3）学会・研究会報告

臼井陽一郎（情報文化学科・教授）
- 「EUの環境行動と持続可能な発展戦略：言説構成論によるガバナンス研究の試み」世界政治研究会（東京大学山上会館、11月24日）。
- "An Evolving Path of Regionalism: The Construction of Environmental Acquis in Comparative Perspective between the EEC and ASEAN". 2006 CREP International Conference: the Dynamics of East Asian Regionalism in Comparative Perspective -- Private-led Regionalism? Koshiba Memorial Hall, University of Tokyo, 15-16th July 2006.

區建英（情報文化学科・教授）
- 「人民権利思想と仁政の価値再構築」記念厳復逝去八十五周年国際学術研究会（中国福建：武夷山、10月19～23日）。

小澤治子（情報文化学科・教授）
- 「日露関係の今後――平和条約問題について」日露学術報道関係者会議（ロシア：国立モスクワ国際関係大学、10月18日）。

小山田紀子（情報文化学科・教授）
- 「アルジェリアの独立と引揚者の歴史―脱植民地化とフランス・アルジェリア関係―」共同研究（科研費プロジェクト）「植民地責任」論からみる脱植民地化の比較歴史学的研究（東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所、10月14日）。

苅部恒徳（情報システム学科・教授）
- 「『Hrothgar王の説教』の意図は何か」第22回日本中世英語英文学会大会シンポジウム『「ベーオウルフ」を読み直す』（京都産業大学、12月10日）。

近藤進（情報システム学科・教授）
- 「新潟県の情報インフラと災害に対する情報通信への課題」情報処理学会2006－IS-98情報システムと社会環境（新潟国際情報大学新潟中央キャンパス、11月6日）。

佐々木寛（情報文化学科・助教授）
- 「ローカル・コミュニティと＜安全保障＞」立教大学安全保障研究会（立教大学、7月1日）。

長坂格（情報文化学科・助教授）
- "Ilokanos in Paris: Narratives of Coping in a Land of Exile" Nakem Centennial Conference: Imagination and Critical Consciousness in Ilokano Language, Culture, and Politics (Honolulu: University of Hawai'i at Manoa, November 9-12)

藤瀬武彦（情報システム学科・教授）
- 「無酸素的運動時及び回復期における高酸素吸入の作業成績に及ぼす効果」日本体育学会第57回大会（弘前大学、8月18日）。

吉澤文寿（情報文化学科・助教授）
- 「『新しい歴史教科書』の問題点」歴史学研究会大会（学習院大学、5月）。
- 「日韓会談研究の現状と課題」東アジア国際政治史研究会（中央大学多摩キャンパス、6月）。

卒論中間発表会開く

情報文化学科3年　小出　蘭夢

おのおのがテーマを決め研究をする卒業論文。それを多くの人に客観的に評価をしてもらう場として、卒業論文中間発表会が11月11日に行われました。

テーマ別に8教室に分かれ、司会やタイムキーパーが中心となり、20分の間で発表、質疑応答、アンケートがなされます。アンケートは報告内容、レジュメ・パワーポイント、話し方、質疑応答の4つに区分され、説明の仕方や速度、発表時間や分かりやすさといった研究内容にとどまらない項目まで総合的評価をし、閉会式で優秀者を発表しました。

運営には3年生の各ゼミの代表が協力し、広報やパンフレット作成、機材・受付係、ビデオや写真係などそれぞれが会を支えました。限られた時間の中で準備し、8教室の足並みをそろえ失敗をできるだけ抑えられたと思います。多くの方々に支えられ無事終了することができました。

さまざまなテーマが自由に聴け、レジュメのまとめて納得のできる論文に仕上がるよう最後までがんばってください。

卒業生も聴きに来てくださいましたが、一般の方がほとんど目につきませんでした。ほぼ学生だけの会場に入りづらい雰囲気を、少しでもなくす工夫が必要だと思います。しかし、発表する側、聴く側双方に発見のあるよい会になったのではないかと思います。

テーマ別に8教室で
アンケートで総合評価

方の違いや時間内での話の進め方などたくさんの発見があると思います。他の学生も卒業論文のためだけではなく、ぜひ普段の参考にしてください。一方、発表者の皆さんはよい発表になるよう多くの時間を費やし、準備を進めてきたと思いますが、アンケートの評価が参考になれば幸いです。その反省を生かし、卒業に向上がるよう最後までがんばってください。

国際交流インストラクターとして学んだこと

情報システム学科3年　山際　佳

私は4月から国際交流インストラクターとして、世界の紛争・平和について学び、それを小学生や高校生に伝えて一緒に考えてもらうワークショップを仲間たちとともに築き上げてきた。

新潟翠江高校で活躍する山際さん（右）

世界で起こっている紛争の構造をいかに分かりやすく伝え、小学生や高校生にその問題への解決案を自発的に考え、意見を出してもらうにはどうしたらよいか。実践をするたびに多くのことに気付き、話し合いの中でいろいろな方法を学んできた。前に立って話をするときは大きな声で、生徒一人ひとりの目を見て話すこと、ジェスチャーや小道具を交えながらの説明や笑顔で接すること、そして生徒が出した意見に対しその意見を認め拍手をすること――。

多くの出会い、一緒に学ぶ喜び

場が盛り上がり子どもたちが問題と向き合って、私たちが思いもつかないような創造的な意見をたくさん言ってくれることもあれば、なかなか盛り上がらず生徒が積極的に参加してくれないときもあり、もっと違った風に接し、違った聞き方をしていれば良かったのではないかと思うことも多々あった。

インストラクターのプログラムに参加したことで、これまで知り合う機会のなかった人たちや、ワークショップに参加してくれた子どもたちを含め、多くの人たちと出会い話せたことが、非常に大きな経験となった。

×　×

本学と新潟県国際交流協会による2年目を迎えた事業。本学学生が子どもたちと世界情勢を共に学び教える「国際交流インストラクター」に選抜され、学校や地域の学集会などに招かれ活躍しています。

課外活動報告（一部抜粋）

期間	団体名	大会名	開催場所	大会結果
4月 7日 ― 9日	バドミントン	第50回北信越大学バドミントン選手権大会	石川	女子1部2位、男子1部5位
4月 8日 ― 9日	男子バレーボール	第25回信越バレーボール大会	上越市	
4月15日 ― 16日	バスケットボール	第60回近県バスケットボール選手権大会	上越市	
4月22日 ― 23日	陸上競技部	第35回柏崎陸上競技選手権大会兼第61回国民体育大会新潟県選手選考予選会	柏崎市	棒高跳び優勝:野村栄一
4月29日	陸上競技部	第11回新潟県学生陸上競技連盟競技会	新潟市	
5月 3日 ― 4日	陸上競技部	第56回中越陸上競技選手権大会兼第61回国民体育大会新潟県予選会長岡大会	長岡市	
5月 3日 ― 4日	陸上競技部	第32回下越陸上競技選手権大会	胎内市	
5月 4日 ― 7日	男子バレーボール	第37回春季北信越大学男女バレーボール選手権大会	五泉市	2部3位
5月 5日 ― 7日	バスケットボール	第40回笹本杯争奪北信越学生バスケットボール春季リーグ戦	石川	2部2位
5月 6日 ― 7日	硬式野球部	第1回社会人硬式野球佐渡大会	佐渡市	
5月14日	バスケットボール	第3回新潟カップバスケットボール大会兼国民体育大会成年男子・女子新潟県代表選手選考会	五泉市	
5月14日	フィットネス研究部	第31回新潟県パワーリフティング選手権大会	新潟市	
5月14日	バドミントン	第4回春季新潟県ベンチプレス選手権大会	新潟市	
5月15日 ― 20日	バドミントン	第55回中部大学第54回中部学生バドミントン選手権大会	富山	男子団体ベスト8
5月21日	茶道部	表千家同門会新潟県支部第23回支部茶会	村上市	
5月27日 ― 28日	陸上競技部	第80回北信越学生陸上競技対校選手権大会	長野	
5月31日 ― 6月4日	硬式野球部	第31回全日本クラブ選手権大会	新潟市	
6月15日 ― 18日	硬式野球部	第77回都市対抗野球1次新潟大会	新潟市	
6月17日	バスケットボール	平成18年度県内リーグ戦	新潟市	
7月 1日	バスケットボール	第51回新潟日報争奪バスケットボール大会	上越市	ベスト8
7月15日 ― 16日	陸上競技部	第61回国民体育大会新潟県予選会	新発田市	
7月21日 ― 23日	陸上競技部	新潟県陸上競技選手権大会兼第61回国民体育大会新潟県選手選考会	新潟市	
7月29日 ― 30日	陸上競技部	第28回北日本学生陸上競技対校選手権大会	宮城	
8月 8日 ― 11日	バドミントン	第51回北信越学生バドミントン選手権大会	上越市	
8月18日 ― 20日	バスケットボール	第15回濱辺杯親善バスケットボール大会	佐渡市	
8月19日	陸上競技部	第2回ゴールデンサマーin新潟	新潟市	棒高跳野村栄一2位
9月 3日 ― 10日	バドミントン	第46回西日本学生バドミントン選手権大会	広島	
9月10日 ― 17日	バスケットボール	第54回北陸バスケットボール選手権大会	出雲崎町	
9月14日 ― 18日	硬式野球部	第33回社会人野球日本選手権第1次新潟県大会兼第11回社会人野球新潟県選手権大会	新潟市	
9月23日	男子バレーボール	第42回秋季市民総合体育祭6人制バレーボール大会	新潟市	
9月30日 ― 10月1日	男子バレーボール	第26回信越大学バレーボール大会	長野	
9月30日 ― 10月1日	陸上競技部	第37回北信越学生陸上競技選手権大会	新潟市	
10月 8日	バドミントン	第54回田村杯・第19回市嶋楯争奪バドミントン選手権大会	柏崎市	村田・倉井（学外者）ペア優勝、村田ベスト4
10月 8日	ソフトテニス	市民ソフトテニス大会	新潟市	
10月15日	男子バレーボール	黒埼リーグバレーボール大会	新潟市	
10月19日	バスケットボール	第40回北信越学生バスケットボール選手権大会兼インカレ予選	福井	
10月22日	フィットネス研究部	第5回新潟県オープンベンチプレス選手権大会	新潟市	
10月26日 ― 29日	女子バレーボール	第54回秋季北信越大学男女バレーボール選手権大会	長野	
10月26日 ― 29日	男子バレーボール	第54回秋季北信越大学男女バレーボール選手権大会	長野	2部3位
10月28日 ― 29日	バスケットボール	平成18年度新潟県バスケットボール選手権大会兼全日本総合バスケットボール選手権大会新潟県予選会 兼第26回北信越総合バスケットボール選手権大会新潟県予選会	新潟市	
11月 2日 ― 4日	バドミントン	第51回北信越学生バドミントン選手権大会	石川	男女1部5位→入替戦勝利残留
11月 3日	ソフトテニス	平成18年度シングルス・ミックスダブルス新潟オープン大会	新潟市	
11月14日 ― 19日	軟式野球部	第27回東日本大学軟式野球選手権大会	千葉	1回戦シード、2回戦対東京電機大学工学部0-6敗退

内定者の一言

「何をするか」が本当の勝負

情報文化学科4年　佐藤　尚生
内定先：(株)コロナ

今年度の就職活動は「学生売り手市場」「学生有利」と言われていた。また就職活動を表す漢字一文字は「楽」というのがトップだったそうだ。先輩の皆さんは「キミたちはいい時に就職したねぇ」「楽だったでしょう」「内定いくつもらったの？」という言葉を投げかけてくる。

でもちょっと待ってほしい。僕ら学生にとっては初めての就職活動なのだ。僕らには比べるものがない。それぞれが苦しみ、悩み、将来を考えた。緊張して臨んだ面接。簡単な漢字さえ書けずに悩んだ筆記試験。それは、今も昔も変わりないはずだ。学生売り手市場だからといって、それは企業の妥協を意味するわけではない。だから僕ら学生は一生懸命やるだけだった。結果的に、数字的に「楽」だったのかもしれないが、あたかも就職活動そのものが「楽」とされてしまうのは、腑に落ちない。後輩にとってもよくないのではないか。

これから就職活動を始めるみなさんへ。就職活動は内定をもらう早さや、その数を競うものではありません。またその企業の大きさを友達と競うものでもありません。たとえ卒業直前に決まっても、100社受けて1社からしか内定がもらえなくてもいいと僕は思います。本当の勝負は入社してからです。「どこで働くか」じゃなくて「何をするか」だと思います。大学生活も「どこで勉強したか」じゃなく「何をしたか」です。

みなさんが楽しみながら納得のいく就職活動を送れることを祈っています。

「信念」を貫けば必ず輝く

情報システム学科４年　宮川　千尋
内定先：（株）新潟日報社

いきなりちゃぶ台をひっくり返すようで申し訳ないが、私は二度と就職活動をやりたくない。「二度とやりたくない」なんて聞いたら、悪い意味でとらえられてしまうかもしれないが、決して悪い意味で言っているわけではない。

悪い意味ではないと言っておきながら、私の就職活動はどうだったのかといえば、もちろんすべてが良かったわけでもない。履歴書がうまく書けずに、手が痛くなるぐらい何回も何回も書き直したこともあれば、面接で大失敗して涙を流したこともあった。何もかもが思い通りにいかず、すべてを投げ出したくなったことも度々あった。

けれど、自分がどんな状態にあっても「信念を貫く」ことだけは忘れずに心がけていた。どんなときでも、自分が想像する未来を信じ「この企業に入社したい！」思いを、相手に伝えることができるように努力してきた。就職活動を通して、私は多くの知識を得、いろいろなことを経験したが、一つだけはっきりと確信できたことがある。それは、「信念を持って就職活動を行っている人は最強である」ことだ。「どこでもいいや」とか「はやく就職先が決まれば良い」と思っている人にはない輝くモノを、信念を持って就職活動している人たちは持っている。学歴や学校名ではない、その輝きを、企業は敏感に感じとり、見てくれているのだと思う。

だから、皆さんには「信念」を持って就職活動を行ってほしい。どんなにつらくても決してあきらめず、その信念を貫いてほしい。数々の苦労や試練を乗り越え、信念がようやく結実したとき、心の底から「二度と就職活動はしたくない」と思えるはずだ。

企業懇談会を開催

過去最多の参加に
情報交換、交流深める

恒例の「企業懇談会」が11月1日、ホテル新潟（新潟市万代）を会場に開催されました。これは日ごろ本学の就職活動にご支援・ご指導いただいている企業の皆さまを対象に、著名な講師による経済講演会等を催し感謝の意を表する会で、今回で11回目を迎えました。

当日は、まず本学から武藤輝一学長があいさつ、槻木公一情報文化学部長が大学の現状などを説明しました。今年の特別講師は経済ジャーナリストの財部誠一氏で、「日本経済、これからのキーワード」と題して講演をいただきました。

今年は235社の企業から、過去最多となる338人の代表者や人事担当者の方々のご参加をいただきました。第2部の懇親会では来賓代表の中山輝也キタック代表取締役社長に乾杯の音頭をとっていただき、本学教職員との活発な情報交換がなされ、さらなる交流を深めることができ大変有益な1日となりました。

■平成19年度　入学者選抜試験概要（要約一覧）

入試区分		募集人員		出願期間	試験日	試験地	試験実施教科・科目	合格者発表日
一般入試	前期	情報文化学科 35	95	19年1月9日(火)～22日(月) ※出願期間内消印有効	19年2月2日(金)	新潟 上越	・国語：国語総合（現代文）・現代文 ・数学：数学Ⅰ・数学Ⅱ （数学Ⅱは、微分・積分を除く） ・外国語：英語Ⅰ・英語Ⅱ 上記3教科の中から2教科を試験場で選択	19年2月7日(水)
		情報システム学科 60						
	大学入試センター試験利用	情報文化学科 15	35	19年2月1日(木)～15日(木) ※出願期間内消印有効	19年1月20日(土)、21(日)の大学入試センター試験を受験していること		学科試験を課さず、19年度のセンター試験の成績で判定。全教科の中から2教科2科目選択 配点：各教科100点。 （3科目以上受験した場合は高得点の2教科2科目を合否判定に使用）	19年2月23日(金)
		情報システム学科 20						
	後期	情報文化学科 10	25	19年2月16日(金)～3月2日(金) ※出願期間内消印有効	19年3月9日(金)	新潟	・国語：国語総合（現代文）・現代文 ・数学：数学Ⅰ・数学Ⅱ （数学Ⅱは、微分・積分を除く） ・外国語：英語Ⅰ・英語Ⅱ 上記3教科の中から2教科を試験場で選択	19年3月13日(火)
		情報システム学科 15						

（注）情報文化学部の定員は、情報文化学科100名、情報システム学科150名、合計250名です。

新潟国際情報大学 学費特別給付奨学金

一般入学試験（前期）の成績により奨学金が給付されます。
※予め、申込が必要です。

情報文化学科	3番以内ーⅠ種	8番以内ーⅡ種
情報システム学科	5番以内ーⅠ種	14番以内ーⅡ種

Ⅰ種　授業料全額（年額675,000円）
Ⅱ種　授業料半額（年額337,500円）

◎入試と奨学金の詳細については事務局までお問い合わせ下さい。　TEL025-239-3111　E-mail gakumu@nuis.ac.jp

紅翔祭を終えて

紅翔祭実行委員長　石高　隆仁
（情報文化学科3年）

去る10月21、22日に行われた紅翔祭は、皆さまのご協力により無事終えることができました。

前年は強風、前々回は中越地震と自然災害に見舞われ続けた紅翔祭ですが、今回は両日とも快晴に恵まれ、キャンパスはたくさんの来場者と学生たちの声で賑わいました。

「色」を出すことができた

例年を上回ったイベント企画

父母会とみずき会のご後援による文化講演会では、アテネ五輪アーチェリー銀メダリストの山本博氏をお招きいたしました。「成功を呼び寄せる方法とは」というテーマで、ご自身の体験談を交えながら大変聞きやすい切り口でお話しいただきました。会場にはたくさんの人にお集まりいただき、たびたび笑い声も沸き上がる和やかな雰囲気で行われました。

今回は例年を大きく上回る学生イベントが企画・運営され、今までとは違った「色」を出すことができたと思います。メーンテーマである「Wake up brand-new days」にふさわしい紅翔祭となりました。今回はその大きな基盤を確立することができたと思います。これを原点とし、後輩たちが来年度以降、より良い紅翔祭をつくり上げていってくれるよう願っています。

最後になりましたが、ご協力くださいました教職員、保護者、企業の方々にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

卒業生の便り

情報システム学科1998年度卒業　木村　真幸

情報システム学科2期生として卒業後、株式会社DTS（東証1部）に入社しました。

ネットワーク事業本部のプロジェクト・マネージャーとして働いています。14人と少ない部隊ながら、フィールドは米・中・韓・印と広く、技術水準も世界トップレベルと自負しています。大手ベンダー向けのフレームワーク開発やプロセス定義などを行っており、やりがいも責任も大きなプロジェクトのマネージャーです。

社内では3000人程度の社員の中から最優秀プロジェクト・マネージャー賞を受賞しました。会社の取材・広告に会社の顔として出ることもしばしばです。

インプレス社より『まるごとEclipse!』という著書も出版しました。また、執筆依頼もあり、技術専門誌の『日経ソフトウェア』に「IT Pro」などを連載しています。

著書も出版、専門誌でも連載

この成功は、IT業界で仕事をする上での基礎的な知識を学生時代に学べたことに加えて、他社に就職した仲間や著名な教授の方々との連携があってこそと感謝しています。

学生時代には、社会に出てプロとして活躍するために、資格を取得したりプログラム言語を学んだりしなきゃ！―などと考えていましたが、実際プロになってみると、仕事は細分化されており、狭く深く知識・経験が問われます。

残念ながら、資格取得や勉強は就職時には多少役に立ちますが、仕事には全く関係ありません。

そうしたことばかりでなく、遊び・部活・サークル・研究室などでつくることができる人脈を広げて、物事を多角的に見る目を養い、人として幅を広げることにも力を入れましょう。

ただし、私の場合は、力を入れすぎて卒業が危うかったのでご注意を（笑）。

㈱DTSの顔として広告に

地下鉄の御成門駅に出ている広告で、木村さんがモデルに。

湧源 YUUGEN

編集後記に代えて

広報委員長　越智　敏夫

「最後の瞽女」と言われた小林ハルさんは1900年に三条市で生まれ、2005年に胎内市の特別養護老人ホームで亡くなった。享年105歳。大往生である。ご存命のうちにハルさんの唄を聞いておくべきだったと後悔している。そこでお弟子さんのお一人である萱森直子さんが師の一周忌におこなった追悼公演を聞きにいった。

場所は新潟市からもほど近い出湯温泉にある石水亭という旅館である。残念ながらすでに営業はやめておられたが、かつて多くの客でにぎわったであろうその座敷で聞いた瞽女唄はとても意外なものだった。

明るいのである。演目は祭文松坂「石童丸」。もっと義理人情どろどろで怨念こもった世界かと思っていたら、まったく違っていた。きざに表現すれば人間存在が全面的に肯定されているのだ。「世の中にはいろんな人がいるけれど、みんなそれぞれでいいじゃないか」という、ほとんど『千と千尋の神隠し』状態である。これは春を待ちわびている人が聞きたがるものだと実感した。だからこそ越後の人たちは長い間、多くの瞽女さんたちを各集落で大事に遇してきたのだろう。

同時に、これは長編詩だとも思った。するとどうしても思い出すのは金時鐘の『新潟』である。長編詩の伝統がない日本語文学において金の詩は異彩をはなっている。しかし、そうした形式上の特質以上に金の作品を光らせているのは、その力強い人間肯定である。金が語る人間は驚くほど多様である。「人間は○○でなければならない」と人を枠にはめる発想を根底から否定している。

しかし、こういう多様性の賛美は考えてみれば当然かもしれない。盲目であるために社会から排除される可能性の高い瞽女さんや、常にその他者性を自認せざるをえなかった在日の人々にとって、日本の社会や国家が語る「理想の人間像」など、差別を正当化する根拠以外の何に見えただろうか。そんな「理想」など無視して、それぞれ人は自分がなりたいように自分を変えていって良いはずだ。小学生のころ、教室の後ろの書棚にあった偉人伝には嫌悪感しか持たなかったが、その理由が今になって少し分かったような気がする。